東寺観智院金剛蔵『醍醐寺年中行事』（118箱3号）の調査報告と翻刻

湯 浅 吉 美

はじめに

年来継続して参加させていただいている東寺観智院金剛蔵聖教類閲覧調査の報告として、小稿では標題資料の書誌事項と全文翻刻とを提示する。

先立つて先ず、長者砂原秀遍猊下をはじめとする東寺（教王護国寺）、同宝物館、さらに観智院の皆様、衷心

より御礼申しあげる。毎年夏の調査に際して一方ならぬ御厚誼を辱うするのみならず、拙稿の公表を常に御快諾くださることに対し、満腔深甚の謝意を表する。

また、橋本照稔猊下を筆頭に、大本山成田山新勝寺と同仏教研究所の方々の御高配に感謝申しあげる。地味な基礎研究に対する尽きせぬ御厚情なくしてかかる作業を永年継続することは不可能で、近年の我が国では大学に

あつても至難のことである。いかほど考えても、微衷をお伝えするに足る感謝の辞を見出すことはできない。

《書誌事項》

醍醐寺年中行事 二卷 (118箱3号 『目録』 6-147頁) ①

〔鎌倉時代初期〕 写 二軸

① 卷上

【装訂】 卷子装。全長九米三八・四糎。

【表紙】 後補素紙表紙、縦三〇・九糎、横三九・四糎。

外題「醍醐年中行事^上」自正月至六月 (直接墨書)。外題下に「寶

菩提院」とあり (外題同筆、直接墨書)。折紙の痕跡を認む。

【見返・遊紙】 見返に元禄十五年 (一七〇二) の修補識

語あり (翻刻参照)。遊紙なし。

【序・目録】 なし。

【本文部分】 内題「醍醐寺年中行事^{付雑々日記}」。楮紙。紙

数二一。標準一紙長五三・五糎。^② 料紙の半数は修訂に

伴う短紙。天地单边、单界。第13紙のみ天地单边、無界、ただし天地界高さは揃う。毎紙二一行。毎行字数不等。界高二七・〇糎。第3紙に押紙 (異筆) あり。第12、15紙に朱注あり。その他、訓点等なし。

【尾題・奥書】 なし。奥巻横二〇・七糎。

【その他】 紙背に同時代の文書あり。また、江戸時代の文書反故を用いて総裏打。

② 卷下

【装訂】 卷子装。全長六米三八・六糎。

【表紙】 後補素紙表紙、縦三〇・七糎、横四三・二糎。

外題「醍醐年中行事^下」自七月至臘月 (直接墨書)。外題下に「寶

菩提院」とあり (外題同筆、直接墨書)。折紙の痕跡を認む。

【見返・遊紙】 見返に元禄十五年 (一七〇二) の修補識

語あり (翻刻参照)。遊紙なし。

【序・目録】 なし。

【本文部分】 内題なし。楮紙。紙数二〇。標準一紙長五三

・七種（三料紙のみ）。他は二・五種（第3紙、一行）から四八・〇種（第19紙、一九行）まで区々。天地単辺、単界。第6、15、17紙は天地単辺、無界。天地界高さは揃うも、異筆の可能性あり。毎紙二二行（標準一紙）。毎行字数不等。界高二七・〇種。第7、18紙に異本注記あり。その他、訓点等なし。

【尾題・奥書】なし。奥巻横二四・五種。

【その他】紙背に同時代の文書あり。また、江戸時代の文書反故を用いて総裏打。

《若干の解題》

本資料については、まず『国書総目録』を検するに、東京大学史料編纂所に一本を蔵することを知る。三宝院蔵本写とあることからすると、同所がその事業のための資料として蒐集した近写のものと推察される。当然、醍醐寺三宝院にその原本を蔵するはずだが、報告者は両本とも未見ゆえ、言及を控える。怠慢の謗りを免れないかも

しれないけれども、報告者は目今、御縁と機会とを得て拝見することのできた資料を対象に、そのデータを斯界に提供することを責務と捉えており、諸本間の異同や資料そのものの成立過程などに関する分析考察は、後日に、あるいは他の専門研究者によって、成されるべきことと考えているので、その意を諒とされたい。^③

次に、すでに田中稔氏による解題があるので、その要点を摘記する。^④

* 本資料は、醍醐寺の年中行事について、その行事ごとくに料足等を書き上げたもの。

* 卷上は正月より六月まで、卷下は七月より十二月までを収める。

* 日を追って行事を一つ書きによって標出し、所要の料物・料足の名称、数量等を記す。

* 柏原庄、牛原庄、大野木庄など、醍醐寺領庄園の名が見え、年中行事に際しての各庄負担の実態を知る

ことができる。すなわち、醍醐寺の経営や寺院経済に関する好資料である。

* 文書の紙背を用いており、その中に元久三年（一二〇六）二月に係るものがある。

* 本文中に、承元元年（一二〇七）記事の加筆（巻下・第19紙―引用注）、建仁三年（一二〇三）十二月三十日記事の別紙補入（巻下・第15紙―引用注）等が見られる。

* 以上の所見から、本資料の書写は、元久三年に近い頃と推定できる。

* 江戸時代の文書反故を用いて総裏打を施しているのは、見返にある元禄十五年（一七〇二）修補識語の時点に係るもの。

まことに的確な記載だが、なお二三、私見を加えておく。

* 料紙横長について。巻上は半数ほどが標準一紙を用いているものの、残りは二十数糎ほどの短紙を切り

継いでいる。巻下は大半が不揃いの短紙で、標準一紙は三紙のみ、ただの一行という部分さえある。

* 筆致について。全体として整った印象を受けるものの、巻下の三箇所にある無界の料紙ではかなり倉卒（異筆の可能性もある）。

* これらのことから、既存原本から転写したものではなく、修訂を繰り返しつつ新たに書き綴った様子が見られる。^⑤

* 見返・修補識語に見える、住職教祐二十四歳、職人松岡秀名十五歳という年齢が、瞠目に値する。^⑥

現状では紙背となっている、料紙の一次使用としての文書も興味深いものだが、総裏打ゆえに判読頗る困難な箇所が多いこと、完形でないものが多いこと、本資料と必ずしも直接には結び付かないこと、等々の理由により、今回の翻刻には含めない。^⑦

注

(1) 『目録』は、京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛藏聖教目録』（京都府教育委員会、一九七五—八六年）を指す。以下の書誌事項には『目録』と相違する計測値などもあるが、報告者の実見・実測したところを提示し、とくに必要のない限り指摘・注記はしない。なお、報告者は書名決定の第一典拠を内題に求める立場に従うので、書名を「醍醐寺」とする。一方、『目録』は外題に拠るゆえ「醍醐」を採る。

(2) 標準一紙長とは筆者が書誌事項の報告をする際に使用している造語である。文字どおり、当該卷子本を構成する料紙一紙の標準的横長を意味する。原則として最頻値（モード）を採るが、継ぎ目糊代に伴う誤差の範囲内において複数の最頻値が出るならば、その平均を採る。もともと複数種類の料紙が用いられている場合には、それぞれの標準一紙長を記載する。事々しいように思われるかもしれないが、一葉ごとに採寸してゆくと、料紙利用の様態が鮮明に浮かび上がってくる場合がある。たとえば、時や人を異にする書き継ぎ、推敲に伴う切断など。

(3) 語弊があればお許し願いたいのだが、私は自身の仕事を以って、町なかの内科・小児科開業医のようなものと考えている。私の出す調査報告は言わば、いわゆる町医者が大病院の専門医に宛てて書く紹介状および添付する所見データである。しかるべき専門家の手に委ね、適切な診断がなされることを期待する。そしてそれは、私の領分ではない。

(4) 京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛藏聖教の概要』（京都府教育委員会、一九八六年）、一三—一頁。

(5) その場合、少数ながら存する異本注記を整合的に解釈しなければならぬが、編纂時に参照した素材の異本と考えることもできる。

(6) 教祐は宝菩提院住職と見るのが順当であろうが、管見に入らない。御教示を乞う。

(7) これまでの一連の報告でも、原則として紙背文書を掲出していないが、これらは別途、「紙背文書集」のような形で共有化することが有効であろうと思っている。その際に考慮せねばならぬのは、中に習作（手習い）あるいは下書きと見られるものも間々あり、実用を果たした文書か否か不分明なものも少なくない、という点である。いわゆる往来物の類を想起すれば、あながち無意味でもなかるうけれど、歴史的事実を語るものとはやはり峻別されねばならない。よって、今少しく想を練りたい。

《翻刻例言》

* 改行、傍記、小字片側寄せ、小字双行などの体裁は原本どおりとする。文字の大小、行頭の字下げなども、努めて原本の態様を髣髴せしめるよう心掛けた。ただし、字間の空きについては、やや統一を図り、十分に再現してはいない。

* 用字については以下の方針に従う。

・ J I S 内漢字および『今昔文字鏡 単漢字 10 万字版』（東京、紀伊國屋書店、二〇〇一年）の TrueType フォントを用いて表現可能なものは、原本の字形を活かす。したがって、同じ字の新旧あるいは正俗の混在する場合がある。

・ それ以外の別体字は、右の範囲内に存する最も適当な文字に改め、必要ならば翻刻注を施すことと対処する。

・ ごくふつうに使われる別体字は、殊更に原本の字

形を出さずに通行字体を用いる（例えば、職↓職、弘↓弘）。

・ 文字の筆法によつては、筆写者がどの字形を書こうとしたものか判然としない場合が少なくない。その際は、概ね通行の字形を用いる。

・ 原本の字形を活かすか、通行字体に置き換えるか、その判断にややゆらぎがある。とはいえ、よほど用字法などの検討に踏み込まぬかぎり、あまり厳格に呻吟することは、むしろ無意味であろう。

・ 本資料においても、大と太、小と少など、他の資料でもふつうに見られる異字通用がある。これらについては、翻刻には原本にあるとおりの字を出し、一々（ママ）を付けなかった。この方針によると誤植の識別が困難という憾みもあるが、報告者は（ママ）をできるだけ使いたくないのである。なぜなら、いわゆる正書法は言わば近現代の国語政策の産物であつて、歴史資料においてきわめて多様な表

記が自在に通用されることは、この分野に携わる

者に周知の**はず**。(ママ)を付ける背景には、正しくは〜と書くべきである、という意識があるけれども、その「正しくは」というのが、実はこちらの誤解であるかもしれない。我々が無知なのかもしれない。無闇に(ママ)を付けるのは好ましくならず、傲慢であるとも思う。なお疑わしい場合には、報告者まで照会されたい (y.yusasa@saigaku.ac.jp)。

* 朱書は『』を以って括弧。

* 翻刻に出現する()は、報告者の加えた字句であることを意味する。

* 毎紙、冒頭に算用数字により紙数を示す。

* 『EX』では注の管理がすこぶる容易なので、原本所見に係る翻刻注は全て注として末尾にまとめた。なお、この点は『EX』を採用するメリットの一つでもある。

* その他、一般的な翻刻に準じて解釈されたい。

《付記》

* 小稿は報告者自身が日本語版 $\text{E}[\text{T}]\text{X}_{2\epsilon}$ (角藤亮氏によるいわゆる角藤版 $\text{p}[\text{E}]\text{X}_{2\epsilon}$)で組版し、大島利雄氏公開の“Layout for Windows” version 3.11.4によって印刷出力したものを版下として使用した。

* JIS外漢字を組版するため、『今昔文字鏡 単漢字10万字版』(東京、紀伊國屋書店、二〇〇一年)のTrueTypeフォントを使用した。当該フォントの著作権は株式会社エーアイ・ネットならびに文字鏡研究会にある。

* 前項のフォントを $\text{E}[\text{T}]\text{X}_{2\epsilon}$ 上で使用するに当たり、堀田耕作氏によるフリーウェア Mjfonts パッケージを利用した。

* これらのソフトウェア等を開発・公開された諸氏に心より敬意を表する。

(後補外題)
醍醐年中行事上 自正月
至六月

寶菩提院

(見返・修補識語)

元祿十五年七月虫拂之節仍令

朽損改裏張表紙感作者志記之

住職

大僧都教祐^廿

細工

松岡注連亮秀名^{十五}

(第1紙)

醍醐寺年中行事 付雜々日記

正月

一 准股堂修正湯讀結番^①

一日 山別當

二日 柏原

三日 牛原北

四日 同南

五日 中夹

六日 曾祢

七日 大野木

已上各預所役也立用无之

一 御吉書事

以吉日執行公文勾當參御前行之^②
座主御裝束鈍色執行同公文袍

先御酒一獻^③
御肴一前 執行肴折敷 公文无之 御培膳侍 執行ハ中童子

御酒坏ヲ執行給天 飲了公文ニ給御酒以後執行開印鑑^③

箱成吉書二通^①
一通ハ納 一通ハ任符 新任所司也 吉書了入箱給御封

付之 御硯箱 紙 印鑑箱御前置儲之

或說執行ニハ別肴无之御酒了乍高坏給之一種被下食

之^三

(第2紙・右端一行空き)

一三寶院元日朝拜并御節供式 作法在別

大黒天神 強飯二舂 地藏四舂⁵⁾

御持仏堂 二舂

御料 御菓子八種中糖 御肴一高坏 上強飯三舂
御菜居物六種 追物八種中ニ茎立御汁物 粥 御酒

供僧 三綱 權官 菓子八種中糖 高坏 強飯二舂
菜六種 茎立汁 高坏 粥酒

勾當以下所司 菓子八種中糖 高坏 強飯一舂五合 菜五種
汁茎立 折敷 粥酒 座ハ大侍 培膳中童子

職掌小寺主三十人 交菓子折敷々紙積之左右肴酒ニ瓶子納一斗
強飯无之 車宿座左右中火ヲコス

堂童子三人 菓子同職掌小寺主分ニ酒一提座ハ政所板敷欵

有職公達分 菓子六種中糖左口肴強飯一舂五合 菜六種⁶⁾
汁茎立 粥酒 高坏

兒共 菓子五種中糖 左右肴 強飯一舂 菜五種 汁茎立
粥酒 塗折敷

上大盤 侍 内侍 中童子 御厨子所 大童子

菓子五種 左右肴 中糖 強飯一舂 菜五種 汁茎立⁷⁾
粥酒 折敷 但内侍已下糖无之

政所 各餅二枚 酒三瓶子納一斗二舂 飯任例ニ斗五舂
二日ハ有ハ一枚无ハ桶餅一口若ハ二口

三今日敷紙等料紙三帖自御塗籠給之

一三日貞觀寺僧正御影供参會供僧節供事 随人数

御影 御菓子四種土器廣カイシキ 木菓子二餅二、

供僧 各菓子六種中糖左右肴 御酒

一八日大仁王會

(第3紙)

米七斗三舂之内 一斗洗米 六斗出飯料 三舂大炊食⁸⁾

「一斗六舂 大仁王會堂莊嚴職掌小寺主十四人并
雜役料上寺人夫二人食料 此事慶嘉注文无之」⁹⁾

上紙二帖 墨一廷 百佛像等摺料

仏布施二卷紙二帖 朝夕座各一卷 油二舂 燈明料

僧布施 朝座講師學頭 布施絹四丈帶一筋 請僧九十八人 各帶
夕座講師大導師布施布一段帶一筋

已上帶百筋料絹三尺許欵 墨紙上紙二帖 已上政所沙汰

執行分紙百帖 百僧各一帖 近代无之

出飯四石五斗之内 三綱三人各一石 權官三人各五斗

御菜十種 下所司

一中門修正雜事 每年頭沙汰

御壇供餅三百三十枚 御仏供飯五斗 料米三斗三升 每月御仏供用之

油六升 燈心甘把

小土器二百 牛王紙二帖

蛇舌料紙一帖

僧前料米一石二斗七升之内

大導師一斗五升 小導師一斗二升 用僧并堂達等并七人各一斗 預堂童子等六人各五升

布施 大導師 小導師 三味僧 堂達等并九人各紙裹一

續松五十把 炭一石 薪木二束

已上皆頭沙汰 但周墻政所沙汰也^⑩

或二斗五升
米一斗四升四合 中門修正莊嚴役職掌小寺主廿九人食料但隨時有增減 政所御沙汰

一七日七種菁事

(第4紙)

自亭子院二懸子御厨子所へ送進之 又笠取ヨリ少々催出之

一上醍醐藥師堂修正事

壇供餅八十枚 用柏原桶餅 但料米一升定 政所沙汰 油一升 政所沙汰

湯讀式 白米一斗五升 御菜六種 汁二種 酒一瓶子^⑪ 土器大八十四小百八十 箸廿前 塩噌等

已上每年牛原納所沙汰正月八日上之料米六斗橫斗

一元日三味堂節供事

交菓子二合 酒一瓶子 肴一前 油三合 炭一炭取

已上三味堂送之

一 清瀧經所節供事

強飯一舛五合 菓子可随人数 朝夕二度各一舛飯定

近來ハ盛菓子一前五種左右看 酒一提送之

ヘツイマツリ三枚 高藏鎰餅三枚

深草勝籠年玉餅廿一枚 井祭餅三枚

御持仏堂可随時 院司樓子年玉餅三枚

番法師三人各二枚 同檀持二枚

一 三寶院修正

小餅百枚 切餅料卅八枚 柏原桶餅四桶也大土器卅 小土器百

一 中門御分餅支配

半分政所 殘味曾水

一 諸堂餅可引支配

三寶院地藏六十枚

塔本十四枚 油三合

三昧堂三枚 西山地藏六枚 油三合

一 中門修正大導師以下引僧供料米事

四斗一舛四合之内 一舛八合大炊食 飯六斗六舛之内 三斗二舛修正二夜料今一夜ハ頭沙汰

(第5紙)

御經藏三枚 油三合

遍智院廿枚 油三合

中院地藏六枚 油三合

大黒天神十枚

御塗籠鎰餅三枚

五大尊五枚

御菜 河内 曾祢両納所役也

一 円光院修正湯讀式 七ヶ日

米二石 供米斗 納所立用

(左端一行空キ)

(第6紙)

一 自正月毎月ニ消息紙三帖自御塗籠公文所給之旬別一帖

結解着到等料也

一度海草事 曾祢庄所進 一年四个度也

正月分 荒布八十束 青苔八十束 甘苔三十帖
稚海草三百連 神馬草六帖 樺布七帖

已上 中荷堅魚十連

支配荒布二十束 青苔卅束 二月一番御僧供料職掌
小寺主給之於御廳調之

(三行空キ)

二月

(第7紙)

一 一日二天百種供養事 御導師學頭勤之

鉢御仏供二坏 料米一斗八舛九合毎月御仏供用之九合、大炊食

政所御布施布一段 御塗籠沙汰 御分百種 御厨子所沙汰

百種 寺中貴賤隨堪盛之

(左端一行空キ)

(第8紙)

一 一番御僧供 二月一日

飯料米六石六斗六舛三合 代飯十石 大炊食一斗八舛三合
加之定

御菜四種之内 ウトメ ヒキホシ 政所沙汰
セリ ウチワラヒ 里職事沙汰

出菜 三綱已下所司等各百卅坏

粥 政所 供僧 三綱 各三斗三舛 堂童子下行之

一 修二月參堂裝束事

座主 供僧 三綱 權官 已上宿裝束 平袈沙

勾當已下 表衣 白袈 五帖袈沙

①

大導師 小導師 法服甲袈沙

(第9紙)

僧綱 有職 鈍色 五帖袈沙¹³

學衆 堂衆 付衣 五帖袈沙

一 修二月政所御分餅支配

六枚 院司三人各二枚

御童子隨人數各二枚

十五枚 小寺主中

六枚 番僧三人各二枚

政所隨人數各一枚

檜物隨人數各二人¹⁴

二枚 銅細工

二枚 御莖作手¹⁵

三枚 非番

八枚 深草八人

三枚 請使三人

一枚 牛飼一人但可隨人數

一枚 舍人但可隨人數

一 修二月飯支配

半分政所中出之 半分御厨子所別當得分

一 彼岸式 初日政所御沙汰

御供十六坏 一種別二坏定 黒法御供一前

御料一前 居物六種 追物八種 汁二種 長座僧前¹⁶

御菓子少々 笠取所進

飯料黒米七斗 番僧下行之 菜料米一石九斗五舛^{御供餅料加五舛定御供十六坏}

御酒三斗 番御酒可用之 折敷五十枚 直下之

(第10紙)

土器百重 大小

(三行空キ)

三月

一 清瀧會

左右舞師各一人自參住之日相節并馬食等下行之日數不定

(第11紙)

左師 日別米一斗馬食大豆一俵藁二束

右師 日別米一斗五俵馬食大豆一俵藁二束

此外炭薪油時々宿所送之

會了退出之時左右師二人各絹三疋綿三十兩給之近代二疋二十兩

但近来二疋二十兩云々或他物隨有計給之

樂人舞人等供給綠物等事18

法會先日樂人舞人合十二人參上以大湯屋為宿所其日湯アリ

饗膳四个度落付一度 次日二度 還朝一度 已上四个度 曾祢庄役也

從食 將監六人 將曹四人 符生三人 人別黒米五合定19

馬食 菜二種汁一種大炊請用途沙汰之土器政所沙汰 人別大豆三俵三個日料 打飼藁人別三束三個日料 藁へ笠取リ進之名別三束

會日々中饗募會料米納所勤仕之以八幡拜殿為饗座以職掌小寺主為倍膳20

(第12紙)

綠物 將監一疋四丈 將曹一疋 符生四丈

試樂事 或後宴

舞人樂人少々被留云々綠物在之饗へ猶曾祢庄役云々

客人儲饗支配事 在別紙

客人御共藏人五位并侍 以大侍為座 培膳中童子

雜色以下雜饗 庄々支配

打飼藁牛粥馬又力等儲之

法會布施僧前料事

導師 咒願 各被物一重若僧綱ナクハ絹藁 米三斗

請僧 各紙褱一 米三斗 引頭二人同請僧若僧綱ナクハ絹藁21

都合被物二重 褱物三十 米九石

(第13紙)

會日清瀧長尾御幣膝突事

布二段 紙二帖一社各一段一帖

請僧裹物事員數三十

納各雜紙十帖 表裏紙九枚繼

誦經物事

納雜紙廿帖 表裏紙十二枚 在諷誦文

新寫供養經事

仁王經十部 新翻古譯隔年
敷紙八枚

(第14紙)

一廿一日三寶院御影供

供僧十五人僧前 西山田所役 侍坑飯一具
捧物頭沙汰

一木目蕨食料 二石下之

(左端四行空キ)

(第15紙)

四月

一一日上醍醐座饗事

飯料一石 酒三斗 折敷五十枚 土器 箸

已上政所御沙汰

菜汁 庄々支配

牛原北 同南 大野木 柏原 中夾

庄林 曾祢 郡 志紀北 同南

柏原納所 若江

一一日權僧正御忌日仏事 僧前得藏庄役 仏性布施政所沙汰

御影供三前 御飯 御菜十種 汁二種 酒一升

御料一前 御飯 御比目 御菜十四種 汁二種 酒一提

供僧十五前 飯 菜十種 汁二種 酒人別五合 高坏一本 人別折敷一枚

預三人 飯 菜同 汁同 酒同人別折敷

下部三人 飯 菜六種 汁同 酒同人別折敷

已上二十五前 但供僧不參所^六上大盤脩之

『當座不置之為承仕沙汰引之』

布施

供養法布一段 長座布施一分
御影御布施長座一分

長座中紙二帖 供僧不參
不輔闕²²

佛

理趣會マタラ一輔
若他仏

經 理趣經 卷
若他經

仏布施一裹 誦經物²³
无之

『近代一具公達兒共ハ前別脩之』

圀飯二具 公達以下配分シテ脩之

(異筆)

於大湯屋温屋有之 「於三寶院一晝夜尊勝タラニ」

(左端一行空キ)

(第16紙)

一十二日前大僧正御忌日仏事

捧物 仏性結衆沙汰毎年頭アリ
僧前 温室田所當

公達

黒米一舛飯 菜六種 汁二種 酒可隨人數

兒共

飯同 菜五種 汁同 酒同

上大盤

飯 菜 汁 酒 皆同兒共

中童子

飯各七合 菜三種 汁一種 酒

御厨子所

同中童子

政所 飯各黒米六合 菜一種 汁一鉢

已上以山階田所當勤仕此也²⁴

御料僧前 御所前田二段役

侍内侍圀飯一具 西山田所役 飯八斗 酒二瓶子 菜六種

温室 日野畠役

同土器員數 政所沙汰

大小百五十重内 八十七重 御料僧前方
六十三重 自余

御料分 居物六種 大一小七 追物八種 大一小八 折敷大三小二
酢器一 蓋三 酒器一 已上五重内 大重小二重 サラスツキ一重

次五十前百三十二重内 大六十七重 前別 大十四
小六十五重 小十三

余分十三重之内 大十重 小三重 已上百五十重

捧物^{仏性}頭沙汰 仏布施一裹 誦經物二^{一中院}一灌頂堂

導師 結衆内勤仕之 被物一重 裹物一 捧物一

長座 十九口^{八講衆四人}之内 各捧物一 中院念仏衆十二人 捧物各一口非
長座分也

座主御捧物 随意 承仕三人布施各一 各念仏衆一人分

(左端一行空き)

(第17紙)

一自十七日清瀧御遷宮卅講五今日僧前支配僧前田所役
捧物政所沙汰

初日 慶藏 西山田役 第二日 丹波公

第三日 行密房得原田役 第四日 浄土房 垣内田役

第五日 因幡上庄 前田役

捧物十五口六 政所御沙汰 講衆十五人25
御殿預一人加之

一四月晦日神祭事

米五斗 上清瀧料 准毘堂承仕下之

米五斗中紙五帖 下清瀧料

米一斗中紙一帖 長尾料(26)

五月

一五日円光院粽支配

合二百把之内 柏原分一百三十把
大野木分七十把

四十八把 供僧六人各八把 七十二把 入寺僧十二人各六把

三十把 修理別當學頭27
知院各一人預二人已上六人各六把

八把 承仕二人各四把 十八把 下部九人各二把

已上百七十六把 以柏原大野木人夫二人上分ハ可上之

一御房用粽支配

合 二百四十把之内五十欸
柏原方百三十把 同下司別進三十把
大野木方七十把 同下司別進二十把

十五把 准毘堂後戸 十五把 尺迦堂後戸

五把 清瀧宮 三把 長尾宮

二把 御持仏堂 二把 三實院地藏

(第18紙) 三把 灌頂堂 一把 大黑天神

五把 中院

已上五十一把

人料支配

三把 三寶院預三人各一把

六把 院司三人各二把

六把 大童子三人各二把

四把 檜物二人各二把

三把 銅細工二人

五把 小寺主中

十把 政所中

六把 番僧三人各二把

一把 内湯屋維那

三把 御枕葛補使堂童子

十七把 深草八人各二把但長ハ三把

三把 御蓮作手一人

一把 非番一人

三十把 河内御節供不足料

已上九十八把

殘百一把 可隨御要

一 御領筭守食

日別一舛 可隨日数

一 晦日积迦講式

御陵田役但五斗田所當五斗ハ政所沙汰

飯黒米一石

菜五種

汁二種

酒二斗

土器百二重大小

箸八十前

已上晦日辰時尺迦堂送之

(第19紙・右端三行空キ)

六月

一无量充院三十講事

自一日一七今日 座主御出仕每日在之鉾色五帖袈沙御共侍毎日二人 結願御布施ニハ皆參

合

七斗 供米斗

七今日御仏供料 日別一斗

一斗六舛 同斗

粉仏供料

一斗七舛 横斗

預四人下部十三人掃治食 人別一舛

七舛八合

講衆料大湯屋湯料 下部十三人役 第四日ワカス

十二石三斗

講衆十五人供米之内 奈良衆五人 五石各一石定

上醍醐衆五人 三石五斗各七斗定 醍醐衆五人 三石八斗各七斗定 但學頭一人加分三斗

已上十三石四斗九舛四合横斗定

油七合 御明料日別一合 供米斗

紙三十枚 日記造紙料 墨一延 筆一管 折紙數一枚 29

拭布二丈 移花一枚 雜紙二帖 粉仏供コツナノ料

已上御塗籠沙汰

關伽桶一口 手水桶一口 杵 已上納所立用

結願 布施 講衆十五人各惟布二段 牛原夜 雜紙卅帖 同役 帶結之 十五筋料絹四丈一筋不足欵

紙積料廣折敷支配 牛原北五枚 同南五、中夾三枚 庄林二、已上十五枚目納殿催出之

(左端一行空キ)

(第20紙)

一同卅講七箇日講衆生料僧前并御料侍壇飯等式

講衆十五人生料僧前式 口別

飯料白米九舛袋入之 菜十五種 塩曾汁実等加之定 大土器盛之

酒三舛 已上

初三个日牛原北 次三个日同南 次一日中夾

次一日中夾 飯料白米三舛折積入之 菜十五種カイマシノ土器盛之 酒一舛

御料 御飯一鉢 御菜十五種 御汁物三種 御酒一瓶四舛 白箸少々

侍壇飯一具 飯一鉢 菜八種 汁一種 酒一垂腹七舛 白箸少々

已上七個日之間毎日調進之初三个日牛原北 次三个日同南 次一日中夾

一同卅講論匠饗式并庄々支配代初并配文初卷年被行之 清瀧宮寶前或三寶院

①

御料六本立 居御料一本御菜六種 御比目一本御菜八種 御汁物二種一本御菜四種 御菓子一本八種

合

御汁物一種一本御菜八種 御湯讀一本御菜二種

長座十五前各三本立 本飯一本菜六種 比目一本菜八種 追物一本菜六種 汁二種

交菓子一坏 大土器廣搔敷折敷居之 湯讀折敷菜一種

酒前別二舛定 都合三斗四舛 ②

已上倍膳僧綱已講ハ侍成業已下下所司若中童子

同饗支配 覺洞院僧正御時執行定延一向沙汰之支配无之云³³

一十一日般若僧正御忌日事 九条前瀧所當之内 下行之
出菜土器員数同四月

柏原大野木 御料御酒二坏
御供二坏

牛原北 長座四前

(第21紙)

一度海藻 曾祢庄所進³⁴

同南 長座四前

中夾 長座一前
御殿預一前

荒布八十束

和布八十束

庄林 長座一前
預一前

曾祢 長座二前
黒法御供一前

青苔八十束

心太百把

郡 長座一前
宮仕一前

志紀北 長座一前
番御子一前

生布苔少々

中荷飛魚十連

同南 長座一前
番御子一前

若江澁河 經番二前
宮仕一前

已上

同布施 隨時不定

支配 和布冊把 荒布冊束 青苔冊把 心太冊把
已上七月六日料供所下之 所殘可為御房用

講衆十五人 各色革皮籠一合

已講二人 加布施各布三段 白紺藍摺

論匠六人并番加布施 五帖袈沙一帖青

御酒三獻之後扇紙三十枚骨三十具 箱入之 肴二被引

之人別各二枚二具 已上御布施遍智院御時定

(後補外題)

醍醐年中行事下 自七月
至臘月

寶菩提院

柏原十俵

已上二十六俵

支配本式

一俵 三寶院兩壇各一俵 一俵 三寶院地藏

一俵 祖師料 一俵 中院

近代无之 一俵 勝俱陀院大僧正御本尊
丈六尺迦

一俵 御持仏堂

(見返・修補識語)
元禄十五年七月虫拂之節仍令朽
損改裏張表紙感作者之志記之
後世法匠御廻向可有之也

住職 大僧都教祐 廿四

細工 松岡注連亮秀名 十五

瓮供 石鍋十口 納米各四俵供米俵定 柏原五口 大野木五口 菜十五種 各上鍋 柏原十口 大野木五口

円光院 柏原預所沙汰 釈迦堂 郡庄預所沙汰

灌頂堂并御持仏堂 同亭子院瓜茄子三懸子進之 為御厨子所沙汰分進之

一七日円光院用途索餅支配

合 二十合之内 柏原方十三合 合別百連
大野木方七合 合別百連

一庄々小俵并瓮供等所進 ②⑤

志紀南北各五俵 瓜 茄子 蓮葉 溝萩等少々

若江澁河各三俵 瓜 茄子 蓮葉 溝萩等少々

七月 (第1紙)

四百八十連供僧六日各八十連 七百二十連入寺僧十二人各六十連

三百連修理別當學頭知院各一人預二人已上五人各六十連

八十連承仕二人各卅連 百八十連下部九人各廿連

(第2紙)

已上千七百六十連上醍醐分以柏原大野木人夫二人運上之 37

一御房用素餅二十四合之内柏原方十三合 同下司別進二合 大野木方七合 同下司別進二合

支配

五合准厨堂 五合尺迦堂 二合清瀧宮 一合深草

二合政所

已上十五合

殘九合 御房用

一六日尊師御忌日料大*食料一斗下行之名別一舛 38

同御影供座主倍膳御施食等作法御料居了先以金七
金御器二口ニ能程ニ御飯分入之次以箸小土器ニ御菜五種許
分入次以大匕大土器ニ御飯分入之御前居之御施食ヲハ西方へ

押寄云々

一深草八人^米八斗下行之人別一斗代土器人別二十重運上之歳末定 39

八月

一无量光院日別御佛供并御國忌兼供米等用途事山鹿庄年貢

合

七石五斗六舛 一年分日別御仏供月別六斗三舛 三舛ハ毎月御月忌

(第3紙)

三斗九舛 一年分香直

(第4紙)

已上七石九斗五舛

一 御國忌護摩用途 自八月七日一七今日

一石四斗 御壇供 日別二斗定

二石一斗 大阿闍梨供料

二石八斗 伴僧二人供料 各二石四斗

二斗一舛 承仕一人食料

二斗 駈仕二人食料 各一斗

二斗 見丁二人食料

二斗九舛之内 一斗四舛開伽桶一口直 二舛同杓二支直
四舛折敷四枚直 九舛裏无三足直

五舛 櫛桶一口直 但随破損作之

油六舛六合⁴⁰

已上七石二斗五舛 除油定

一 御國忌仏事用途

一石 御経料物

五斗 御導師布施 學頭勤之

二石七斗 請僧九人布施 各三斗定

已上四石二斗

(第5紙・右端一行空キ)

一 彼岸用途 同二月

(二行空キ)

九月

(第6紙)

一 六日長尾師子祿物事

布一段 越前藍摺 若随有^{云々}

一 九日清瀧長尾御幣事

布二段 紙二帖 両社各一段一帖

(第7紙)

一 自十五日円光院理趣三昧御供并供料護摩用途等^仏 近來

一斗 承仕下之 壇御仏供 粉仏供

六斗^{七舛イ}七合 一人分

五斗^{七舛イ}七合 一人分

五斗七舛七合 一人分

五斗七舛七合 一人分

五斗七舛七合 一人分

五斗七舛七合 一人分

五斗七舛七合 一人分

已上預七人之内二人六斗^{七舛イ}七合^{六イ}五人五斗七舛七合
七舛七合食也

(第8紙)

已上四石一斗九舛九合下部下之 供米斗

同護摩用途

三石

三石

大阿闍梨供料

伴僧十二人供料各人別二斗五舛

三斗四舛

已上六石三斗四舛

六石

十六石八斗

八石四斗

八斗四舛

一斗六舛

一斗二舛

二舛

二斗一舛

已上四十三石八舛九合 供米斗

(第9紙・右端一行空キ)

一 円光院垂布事

毎年替之 理趣三昧以前沙汰
牛原納殿二人自御塗籠給布裁縫之

①

合三間

後戸一間 脇戸一間 土戸一間

承仕一人淨衣并食料二斗淨衣

大僧供

經衆廿四人 人別七斗

供僧六人 人別一石四斗

預二人承仕二人食人別二斗二舛

桶二口杓二支直 納所立用

筵二枚直 納所立用

燈心直 納所立用

裏无七足直 納所立用

後戸 五尺五寸五分六_一 白細美布

脇戸 五尺四_一 白細美布

土戸 六尺四寸五_一 皮牟木布

已上白六丈布一段 二間料 皮牟木布一段 若實

此外拭布二丈

一自廿六日四个日延喜御國忌釈迦堂御八講用途郡庄米

二石 講師四人各五斗 二石三斗四合 用僧十二人各一斗九升二合

一斗九升二合 堂達一人料 三斗六升 預三人各一斗二升

(第11紙)

三斗六升 堂童子三人各一斗二升

都合五石二斗一升六合

一廿二日理趣三昧結願仏經供養事

佛一鋪 料物布一段 越前藍摺 敷紙十二枚

佛布施 中紙一帖 誦經物一裹 在誦誦文 表裏十二枚

導師布施 絹四丈 請僧三十口布施 上紙六十帖 人別各二帖

已上円光院御國忌

(左端一行空七)

(第10紙)

一廿三日笠取清瀧御祭御幣紙一帖進之納殿沙汰

同布施 講師四人各絹四丈 曾祢庄絹二疋 用僧十二人各紙二帖 合廿四帖

誦經物一裹 在誦誦文

同御八講之間每日御料并五卷饗式 每日御料四个度 五卷饗一度

御料 二高坏 御比目

公達有職 御菜六種 兒同折敷 修學者侍 内侍

中童子 御厨子所 大童子 已上皆悉折敷 菜同 他房有職等不催之

已上随人数前別飯白米七合菜三種

政所 菜少々

已上■自供所御厨子所へ調進之御厨子所別當⁴²

青苔八十把

中荷 豎魚十連

任例支配沙汰之御酒无之仍以八講頭酒肴之

支配 荒和布四十束 青苔四十把
和布四十束 尺迦堂八講料供所下之

御酒用之

(二行空キ)

十月

一九日雜菓子百合之内 柏原五十合 大野木五十合

(第13紙)

支配

一上醍醐四日准胎堂曼茶羅大仏供頭餅支配事
政所御分

六合院司三人各二合

十合 小寺主中給之但無用途之時不賜之

半分政所

半分御房中 味曾水

六合番僧三人各二合

二十合 政所酒二瓶子直米一斗二舛番僧沙汰

一下醍醐八講政所御分飯支配事

三合野太

二合牛飼一人

半分政所

半分御厨子所別當

十七合 深草八人各二合但長一人三合

已上六十四合 所殘三十六合 御房用

(第14紙・右端一行空キ)

一五日遍知院僧都御忌日式 笠取預所沙汰所當米六斗募之

生身供二前

一度海藻 (第12紙・右端一行空キ) 曾祢庄所進

御料二本内 追物八種 居物六種 御汁物二種 御酒

荒布八十束

和布八十束

供僧十五人前別白米一舛定 御菜十種 汁二種 御酒 人別高月一本折敷一枚

預三人 前別同 菜同 汁同 酒折敷一枚

下部三人 前別同 菜六種 汁同 酒 人別折敷一枚

坏膳中童子在折敷饗

(第15紙)

一 十日円光院廊御忌日事 大嶋庄納所立用

御仏一鋪料八斗 法花経一部料五斗

仏供三舛 導師三斗 請僧五人各二斗 已上二石三斗

預二人各一斗 承仕二人各八舛

下部二人各五舛

已上三石九舛 殘米三斗五舛 二合二勺

建仁三年十二月卅日

誦経物一裹在諷誦文 納雜紙十帖

仏布施一卷 雜紙一帖 裹之

紙敷紙十二枚 油三合近代二合

已上政所沙汰

(四行ホ下空キ(コノ料紙、無界))

(第16紙)

十一月

一 俱舍卅講出菜土器員数 同四月出菜

同捧物事五十口之内講衆番論匠六人 山別當各加布施在之

(左端二行空キ)

(第17紙)

一 晦日神祭事

米五斗 上清瀧料

米五斗 下清瀧料

米一斗 長尾料

一 三味堂仏名事

米五斗 三味僧沙汰也 弘支名田所當米内用之

(第18紙)

十二月

一十四日恒例結縁灌頂用途

御仏供米六斗三舁 政所御沙汰下部下之 御堂焼夫後三斗九舁九合 下行之

燈心直米二舁 政所御沙汰 佛布施二裹 兩壇料 政所御沙汰

御明油 畠所當 拭布一切 政所御沙汰

墨二廷 記錄料 政所御沙汰 筆二管 記錄料 政所御沙汰

繼紙料紙二十枚 記錄料 政所御沙汰 土器大卅 小百

折櫃一合 三摩耶戒料 折敷二枚 三摩耶戒料

炭一籠 柏原炭後戸送之

同布施事 政所御沙汰

色衆廿人 各絹四丈安敷庄 乞戒一疋 僧綱分一疋 若加布施布一段 小壇一疋

行事一人 四丈 三寶院三綱巡役

執蓋三人之内一人⁴⁸行事兼行之各布一段

(第19紙)

十弟子四人 各中紙二帖 預三人同

持幡二人 同 螺吹二人 同 預三人之内二人兼 行之

鐺持二人 同 下部三人 同 各一帖

⁴⁹ 執蓋已下役人布施人別雜紙十帖自承元々々々安食庄役被定了仍二百帖⁵⁰ 進濟了

同饗式 自承元々々々生料被定了職衆人別二斗役人各一斗都合五石七斗 以柏原米被引了

御料 居御料一本 御比目一本 御汁物一本 已上御菜十四種 御酒一提 御粥 已上本式

近來式 号温飯御石鍋御料 御菜八種許 御汁物二種 御酒一瓶⁵¹三舁

色衆

飯白米一舁三合 菜十種 汁二種 酒无之

行事 同色衆

三綱 飯白米一舁 菜七種 汁二種 酒无之

十弟子持幡預 已上同三綱

下部三人 飯同三綱 菜五種 汁二種 酒无之

神馬草六十把 中荷 堅魚十連

已上

一 円光院後戸酒肴式 十二月卅日 柏原 大乃木 牛原此三納所
巡ニ年々勤仕之

支配 荒布二十束 元三料院司給之 神馬草少々 同

餅五十枚 雜菓子十合 一種ヲニ合定

御酒八舛 肴二種

一 正月料 讀瓜一鉢 讀茄子一鉢 亭子院役トシテ
十二月廿七八日比御厨子所送之

土器 大十重
小四十重

(左端一行空キ)

(第20紙)

一 円光院佛名式 十二月廿二日 柏原納所役立用二石 供米斗

白米四斗 御酒一斗八舛内 次八舛四舛ハ
此ニテ下部飲之

御菜二種 汁二種 熱 冷

一度海草

荒布八十束 青苔百把

注

- (1) 讀、「瀆」ナルベキモ一貫シテコノ字形ニ作ル。
 (2) 培、ママ(陪)。以下同。
 (3) 飲、不明字ヲ擦消テ重書。
 (4) (双注右行「納」ノ下) 空キ、ママ。
 (5) 舛、本資料デハ単位「升」ヲ一貫シテ「舛」ニ作ル。
 (6) (双注右行) 口、虫損(「右」ナルベシ)。
 (7) (双注右行) 菜、不明字ヲ擦消テ重書。
 (8) 六斗出飯料、押紙ニ書ス。(双注左行)、不明字ヲ擦消。
 (9) 「一」内、押紙ニ書シ、次行及ビ次々行「上紙二帖」油二舛^{推明料}ヲ隠ス。
 (10) 牆、「牆」ノ俗字(大漢和補一〇一番)。
 (11) (大八十四)ノ八十、不明字ヲ擦消テ重書。
 (12) 沙、ママ(娑)。以下同。
 (13) 僧綱、「學衆」ヲ擦消テ重書。
 (14) 二人、ママ(「二枚」ナルベシ)。
 (15) (銅細工)ノ二枚、左傍ニ不明字擦消痕アリ。
 (16) 「八種」^{「汁」ノ間、「中」ヲ擦消。}
 (17) (右注)近代二疋二十兩、同字句(朱・同筆)ヲ擦消テ重書。
 (18) 緑、ママ(祿)。他ニモ散見、一々注サズ。
 (19) (双注右行) 監、不明字ヲ擦消テ重書。符、ママ(府)。
 (20) (双注左行) 倍、ママ(陪)。
 (21) (コノ兩行ノ朱注)若僧綱ナラハ絹裏、本文同筆ト見ユ。
 (22) 輔、ママ(補ナルベシ)。

- (23) (佛)双注右行) 輔、ママ(鋪)。
 (24) ■、墨抹。原字「時」カ。
 (25) (十五口)右注) 六、訂正符号等ナシ。(双注左行) 加、抹消符号ノ如キ墨痕アリ。
 (26) 四月晦日条ノ四行、三行ノ間ニ書ス。追筆カ。
 (27) (已上六人)ノ六、ママ(五)。
 (28) 補、国字。訓「おおえびかずら、ぶどう」。「蒲」ナルベシ。
 (29) (折紙)ノ紙、墨抹シテ右注ヲ記ス。
 (30) 次一日中、墨抹。
 (31) (双注左行) 實前、「拜殿」ヲ墨抹シテ右傍ニ書ス。或三寶院、墨抹。
 (32) 「酒前」ノ五字分ホド上ニ補入符アルモ、対応スル字句ナシ。
 (33) (小字注) 支、不明字ヲ擦消テ重書。
 (34) 曾、不明字ヲ擦消テ重書。
 (35) 瓮、ママ(盆)。
 (36) 石鍋十口、墨線ニテ次行「円光院」ノ双注左行位置ヲ指示シテアリ。(石鍋十口)ノ石、「土」ト重書。先後不分明ナルモ、先「土」後「石」ト見ユ。
 (37) 二、不明字ヲ擦消テ重書。
 (38) *、未詳。字形ハ「恭」ノ「小」ヲ「ホ」(木)トシタルガ如シ。
 (39) 二、存疑(虫損)。
 (40) コノ行、行間ニ後入(本文同筆)。
 (41) 絳、ママ(縫)カ。
 (42) ■、墨抹。原字不明。
 (43) 月、ママ(坏)。

- ④④ 坏、ママ(陪)。
- ④⑤ (行頭)紙、墨抹シテ右傍ニ「經」ヲ書ス。
- ④⑥ コノ条、墨筆移動符ニテ晦日神祭条ノ前(第16紙左端行頭)ヲ指シテアリ。
- ④⑦ 弘、存疑。字形ハ左ニ「方」、右ニ「口」。
- ④⑧ 各布一段、不明字ヲ擦消テ重書。
- ④⑨ (下部三人)双注右行)同、墨抹。
- ⑤⑩ 執蓋、「十弟子」ヲ墨抹シテ右傍ニ書ス。